

弔辞

——改めての追悼にかえて

以下は、告別式での私の弔辞、ほぼ全文です。私の気持ちはこれに尽きているとの思いから、再録させていただくことにしました。但し、字数制限に合わせて、ごくわずかの部分を割愛させていただきました。

竹市先生に最後にお目にかかりましたのは、数年前、京大病院へ妻を連れて行ったおりのことでした。その日先生は、車椅子に乗られて、お嬢様と、病院のロビーにおいでになりました。その日も先生は、私の妻の病氣のことをお気遣いくださいましたが、先生はするように、家族のことをおりに触れて気に掛けてくださる、心優しい先生でした。

二年前の先生の叙勲祝賀パーティーのうちに、私はあることを、みなさまにお話できればと思っておりましたが、直

富田恭彦

前に妻が他界しましたことから出席かなわず、先生にお会いして、昔話をみなさまにご披露することが、できないままとなりました。

私たちが先生とともに青春を過ごしたあの頃のこととは、もとより内山勝利先生をはじめ、いくたりかのみなさまがよくご存じのことなのですが、とりわけその頃先生と深く関わっておいでになった、元大阪大学副学長の溝口安平さん、元愛媛大学教授の杉山聖一郎さん、元慶応大学教授の中川純男さんは、すでにこの世においでになりません。そのため、私などがこのようなことを申し上げるのはと思いつつも、少しだけ昔話をさせていただくことを、お許しください。

私が京都大学大学院文学研究科の院生だったとき、体の大きな哲学の先生が関西大学から京都大学教養部に移ってこら

れ、私たちはその大きな先生が文学部で担当される講義を拝聴することになりました。その後私は、当時文学部の助手をされていた杉山聖一郎さんのご紹介で、竹市先生と一緒に仕事をさせていただくことになりました。最初にさせていたのが、竹市先生が編集された岩波書店刊の、『哲学の現在』という本に収める、ハインリッヒ・ロンバッハの論文の翻訳でした。

竹市先生は、京大教養部においてになってから、すぐに「現代哲学研究会」という会を立ち上げられ、その会をベースに「現代哲学の根本問題」という全一二巻のシリーズの刊行に着手されました。「現代哲学研究会」は、名前は「研究会」という地味なものです、そこには当時日本中の優れた哲学者が集まりました。例えば、中村雄二郎さんや、野家啓一さん、村田純一さん、永井均さんといった、京都大学とは直接的には関わりのない多くの気鋭の方々が、お顔を見せてくださいました。

竹市先生がその刊行を進められた「現代哲学の根本問題」シリーズは、当時我が国ではほとんど知られていなかった海外の優れた研究成果を広く集めて翻訳するもので、一九七七年に刊行された『解釈学の根本問題』から始まって、一九八五年の『分析哲学の根本問題』に至る全一二巻は、それが刊行される度に、関東圏では例えば「東京大学新聞」がその内容を一面を使って詳しく紹介してくださるという、そ

ういう状況でした。

今では例えば、「解釈学的循環」や「地平融合」といった概念は、哲学をこととする者にとっては周知のものとなっています。けれども、それは、竹市先生が始められた「現代哲学の根本問題」シリーズが我が国で広く読まれるに及んで、我が国の特に若い世代がそれを専門常識として受け入れるようになった結果であり、そのことによって、我が国の哲学の状況は一変することになりました。今ではそのことをリアルタイムに知る人は少なくなりましたが、今私たちが常識だと思っていることの多くは、実は、現代哲学研究会の活動と、その成果の一部としての「現代哲学の根本問題」シリーズの刊行によるものであります。

当然のことながら、現代哲学研究会には、竹市先生のご友人のドイツの気鋭の哲学者が、たくさん来日・参加されました。私がアール先生と意見交換をしたのも、ツインマリー先生と京大近くのそば屋さんと議論をしたのも、バルツツイ先生とお話をしたのも、みなその現代哲学研究会の例会との関係においてでした。そのようなわけで、その頃の日本の哲学は、京都大学教養部を中心に動いているとの感がありました。

今述べましたことは、竹市先生がなされたことの一部ですが、特に先生は、自分で考えることを重視されそれを実践されるときにも、私たちにもそれを強く求められる、教育者でもありました。かつて現代哲学研究会に実際に関わられた

方々の胸には、今もきつとそれについての思いが、さまざまにおありであろうと思います。

先生、本当に、ありがとうございました。

私自身は、先生と、ときに激しい議論になることもありましたが。けれども、先生の学恩は、辻村公一、藤澤令夫両先生のそれとともに、今も胸に深く刻まれています。

令和元年六月二三日

竹市先生は非常に精力的で、もしこのように表現することをお許しいただけるなら、ときには「ブルドーザー」のようになことを進められました。先生はご存じのないことですが、私も、先に亡くなられた、かつて現代哲学研究会の事務局長を務めておられた溝口宏平さんと、「先生が枯れてひっそりとすごされるようなことになったら、二人でお酒を持って、昔話をしに伺おう」と約束していたのですが、今となつては、それは果たせないことになりました。

私には、あの世があるのかないのか、確たることはわかりません。それに、安らかであることが、あのようにな精力的に日々を過ごされていた先生にとつて、ふさわしいことかどうかともわかりません。ですから、あえて、「安らかに」とは申し上げません。けれども、先生のこれまでのご恩は、私だけでなく、これまで先生の学恩を受けた多くのみなさまの心に、しっかりと刻まれております。ここに、そうしたみなさまの名代として、先生に、改めて、御礼を申し上げます。いと存じます。